

那智なちの滝

和歌山県那智勝浦町



984年の即位後わずか2年で皇位を追われ、出家した花山上皇(968~1008)は、その後熊野へ向かい、失意のなか、山中にこもって千日修行を行なった。その山が那智山である。

那智山の緑は深い。熊野灘に面した那智の浜から那智川に沿って行き、上り坂にさしかかると、すぐに原生林が

広がる。熊野那智大社への参道である大門坂の左右にも杉が林立し、視界を遮っている。

坂を歩いていると、かすかに滝音が聞こえる。中ほどまで登ったあたりで、木々の葉の向こうに、その音の源が垣間見える。「那智の滝」(那智大滝)である。



那智の滝。神武天皇が東征の折りに八咫鳥やたがらすに導かれてこの滝を見つけ、神として祭ったと伝えられているが、熊野に住む人々はそれ以前からすでに崇めていたという。

大門坂の終点・熊野那智大社は、本宮大社、速玉大社と並ぶ熊野三山の一つで、熊野夫須美大神を主神としているが、もとは那智の滝を崇めていたといわれている。その名残りは、滝の近くにある、滝を神体として祭る飛瀧神社にとどめられている。

その飛瀧神社の大鳥居をくぐり、石段を降りると、原生林を背景に、一直線に落ちている那智の滝を見上げられる。高さ133m。那智山の奥山・大雲取山からの本流にいくつもの流れが重なり、毎秒1トンの水が一気に断崖を走る。落ちた水は岩を叩き、砕け散る。その轟音とともに飛沫がほとばしる。お滝拝所で目の当たりにする深さ10mの滝壺からは水煙がたち、衣服を濡らす。そこでは、人の話声も滝音でかき消される。

山中には那智四十八滝があり、那智の滝といわれているのは、そのうちの一の滝のことである。上に行けば二の滝、三の滝と続く。道は通じているが険しい。二の滝付近が、花山上皇がこもった場所だ。

花山上皇の御幸は、907年の宇多上皇に続く上皇の熊野詣だった。花山上皇の御幸からほぼ1世紀後の院政時代は、上皇たちが次々と熊野三山を詣でた。その後熊野信仰は庶民にも浸透し、「蟻の熊野詣」といわれるほど多くの参詣者が熊野を訪れることになる。

厳しく、神々しい熊野の自然ととも



那智の滝は大己貴命を祭っており、幅13mの銚子口(滝の落ち口)にはしめ縄が張られている。



丹塗りの美しい社殿の熊野那智大社。境内には平重盛が植えたといわれる樹齢約800年の大楠がある。



西国三十三所第一番礼所である青岸渡寺。いまは隣り合っているが、明治の神仏分離以前は那智大社と一体となっていた。



青岸渡寺から見た、広大な那智原始林を背景に落ちる那智の滝。左の丹塗りの塔は青岸渡寺の三重塔。

に彼らをひきつけたのが、青い海を渡ると南に観音浄土があるという補陀落浄土信仰だ。その観念は、熊野那智大社に隣接する青岸渡寺の名にも示されている。そして、生きながら小船に乗って浄土を目ざすという補陀落渡海も、那智の浜辺にある補陀洛山寺を拠点として行なわれたという伝説がある。

山中から那智の滝となって落ちた水は、険しい那智山をさらに下り、熊野灘に注ぐ。那智では、その水の音が耳に入る。水と山は、古来、人にとって聖なるものだった。そして滝は、水と山の神秘性を兼ね備えたものである。とくに、豊富な水が、高嶺から垂直にあふれ落ちる那智の滝は、より神聖な印象を強める。静寂を引き裂く滝の響きは、自然に対する畏怖の念を抱かせる。

那智の滝は、熊野灘の海上からも遠く望むことができる。その姿は、まさに神が降り立つ御柱のように見えると



補陀落渡海の拠点だった補陀洛山寺。境内には、人ひとりがやっと入れるほどの、復元された渡海船がある。



いう。那智は、水と山の豊饒を感じられる、日本でも希少な場所である。

よく聞こえる時期
1年中聞くことができる。多雨の時期は水量が多く、とくによく聞こえる。

問い合わせ先
那智勝浦町観光課
TEL(0735)52 0555(内線151)

参考文献：環境省大気保全局大気生活環境室発行『残したい日本の首風景100選』/CFプレット、梅原猛『日本の原郷 熊野』、中上健次『紀州 木の国・根の国物語』